

福岡県行橋市大字津積外所在
古代山城跡の発掘調査概要報告

GO SYO GA TANI KOU GO ISI
史跡 御所ヶ谷 石籠神

行橋市文化財調査報告書 第26集



1 9 9 8

行橋市教育委員会

史跡御所ヶ谷神籠石
～行橋市文化財調査報告書第26集～
正誤表

頁	行・註記	誤	正
2	30	川 <u>辺</u> 昭人	川 <u>述</u> 昭人
5	14	199 <u>8</u>	199 <u>7</u>
5	31・註(3)	『徳永川ノ上遺跡』 椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 7 1992	『徳永川ノ上遺跡Ⅱ』 一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告書 第7集 1997
5	40・註(11)	大宰府古化論叢	大宰府古 <u>文</u> 化論叢
6	31	<u>石築</u> の	<u>石積み</u> の
9	3	<u>企画</u> 性	<u>規格</u> 性
13	1	2個柱穴	2個の <u>柱</u> 穴
13	36	石組みまで <u>あ</u> 伸びて	石組みまで伸びて
14	21	<u>堀込</u> みが	掘込みが
19	25・註(2)	行橋文化財	行橋市文化財
20	4	徐々現し <u>つ</u> つ	徐々に現し <u>つ</u> つ
20	4	想像しえな <u>つ</u> た	想像しえな <u>か</u> った
20	34	列石石材が <u>転</u> 用が	列石石材の <u>転</u> 用が
21	8	白村江以降の <u>築</u>	白村江以降に <u>築</u>



1. 列石と版築土壘断面(A 2 トレンチ)



2. 列石と柱穴群(A 2 トレンチ)



1. 列石と版築土塁
(A 7 トレンチ)



2. 柱堀方と版築土塁断面(B 1 トレンチ)



1. A1トレンチ



2. 土壘版築の状況(A2トレンチ)



3. A3トレンチ



4. A4トレンチ



1. A5トレンチ



2. A6トレンチ



3. A8トレンチ



4. A9トレンチ

序

周防灘に望み、豊かな京都平野の中央に位置する本市にはかつて、豊前地域の中心として栄えた歴史を物語る貴重な文化財が数多く残っています。

第3次行橋市総合計画では、個性と潤いのある街づくりの実現のため、こうした歴史的遺産を積極的に活用していく方向付けがなされました。

数多い市内の文化財のなかでもとりわけ注目されるものが御所ヶ谷神籠石であります。この遺跡は7世紀に築かれた大規模な山城跡といわれ、昭和28年に部分的に国の史跡に指定されました。

史跡は地元の方々のご尽力もあり、周辺の自然環境とともに、よく保全されています。こうしたことから市では御所ヶ谷周辺の史跡と自然をいかした公園整備を計画しているところです。

しかしながら、御所ヶ谷神籠石は指定後も発掘調査などが行われず、遺構の多くが山中に埋没していたこともあり、遺跡の範囲も確定できていない状況がありました。

市教育委員会では、御所ヶ谷神籠石と周辺の自然環境の保護体制を充実させるべく平成3年度、4年度で、史跡御所ヶ谷神籠石保存管理計画策定事業を実施、ひき続き平成5年度より遺跡の範囲確認と実態解明に向けて発掘調査に取り組んでいます。本書はこの調査の概要を報告するものであります。

謎を秘めた神籠石の保存と解明に本書が少しでも役立てば幸いです。

最後に調査にあたって、快くご協力いただきました地権者の皆様、地元津積区、神籠石を共有する犀川、勝山両町の教育委員会、ご指導いただきました文化庁、県文化課の諸先生方に心よりお礼申し上げます。

平成10年3月31日

行橋市教育委員会

教育長 白石 壽

例 言

1. 本書は行橋市教育委員会が実施した福岡県行橋市大字津積字御所ヶ谷970番外に所在する御所ヶ谷神籠石の発掘調査の概要報告書である。

調査は平成5年度から平成9年度現在まで継続して行っているが、本書はそのなかでも外郭線の調査を中心に報告するものである。

2. 本書に掲載した実測図のうち、遺構は小川秀樹、内野陽子、三井恭子、坂本千恵子、木下孝子、工藤美枝子が、遺物は小川と奥野康代が作成した。
3. 遺構、遺物の製図は奥野が行った。
4. 遺構、遺物の写真撮影は小川が行った。
5. 中門の立面の写真測量図は株式会社パスコに委託した。
6. 御所ヶ谷神籠石の地形測量は、写測エンジニアリング株式会社に委託した。
7. 本書に掲載した遺物および写真、実測図は行橋市教育委員会で保管している。
8. 本書の執筆、編集は小川が担当した。

目 次

I	はじめに	
1.	調査の経過	1
2.	調査体制	2
II	位置と環境	3
III	遺跡の概要	6
IV	調査の概要	
1.	調査区について	10
2.	A2トレンチ	10
3.	A7トレンチ	14
4.	B1トレンチ	17
5.	出土遺物について	19
V	おわりに	20

I はじめに

1. 調査の経過

御所ヶ谷神籠石は、昭和28年の国史跡指定当時、遺跡の全容は十分把握されておらず指定も部分的なものであった。

平成2年度、本市において御所ヶ谷神籠石周辺の史跡自然公園構想が浮上し、市教育委員会としても、遺跡の保護体制を充実させる必要から平成3年度、4年度に文化庁国庫補助事業として史跡御所ヶ谷神籠石保存管理計画策定事業を実施した。策定委員会では御所ヶ谷神籠石全域の史跡指定が必要であるとの認識が示され、これにともない遺跡の範囲確認調査が急務となった。このため平成5年度より、文化庁の補助を得て御所ヶ谷神籠石の初めての発掘調査が始まった。

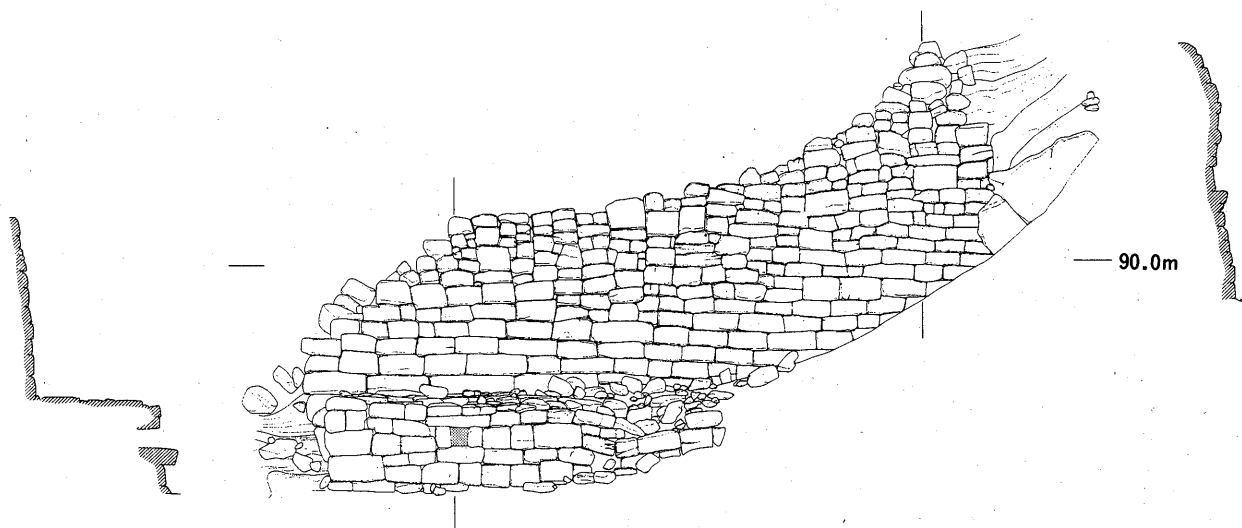
調査は遺跡の範囲確認を最優先とし、外郭土塁線の調査から着手した。

平成5年度は行橋市域の土塁推定線を伐採。トレンチを掘削し、列石や柱穴、精緻な版築土塁を確認。列石は露出せず版築土塁に被覆されることが判明した。第二東門のトレンチからは須恵器の長頸壺片が出土した。また中門の立面図を写真測量委託して作成するとともに、遺跡内に調査用の三級基準点を7カ所設置した。

平成6年度も5年度に引き続いて外郭土塁線の調査に取り組んだ。A2トレンチで版築土塁内の柱跡を確認。B1トレンチでは列石のない版築土塁が検出された。

7年度以降は外郭線の調査と併行して城内の調査にも着手した。7年度には城内の列石線の分布調査と一部トレンチ調査を実施した。

平成8年度は南尾根と西尾根を巡る外郭線確認のため、犀川、勝山両町の協力を得て下草の伐採と分布調査を行った。確認できた列石や推定される外郭線には測量杭を設置し、後日、業者に測量委託して、1/1,000地形図に記入した。城内の列石の調査を継続するとともに礎石のある中央丘陵の伐採と地形測量を実施した。礎石についても一部トレンチ調査を行った。



第1図 中門西側石塁 立断面図 (S = 1 / 200)

2. 調査体制

調査関係者は下記のとおりである。

御所ヶ谷神籠石発掘調査指導委員会

小田富士雄（福岡大学教授 福岡県文化財保護審議会専門委員）

石松好雄（福岡県教育庁指導第二部文化課長）

川本義継（豊津町教育長 行橋市文化財調査委員）

総括	行橋市教育委員会	教育長	白石 壽
		教育次長	加来 博
		社会教育課長	浜島 一義（平成5年）
		社会教育課長	永岡 正治
		社会教育課 文化係長	竹下 和則（平成5年）
庶務		社会教育課 文化係長	西江 文敏
		社会教育課 文化係	竹田 浩輔（平成5年6年）
		社会教育課 文化係	西村 有二（平成7年8年）
		社会教育課 文化係	丸山 剛
		社会教育課 文化係	小川 秀樹
発掘調査担当		社会教育課 嘱託	内本 重一（平成5年）

発掘作業従事者

池永行雄 井上信隆 今村美香 内野陽子 江藤常照 江藤久美子 大平明芳
 大平菊雄 大平利生 片桐公尾 川本一正 川本正春 木下孝子 楠本ハマエ
 工藤美枝子 国永敏枝 坂下光雄 坂本千恵子 阪本尚江 佐藤愛子 佐藤裕子
 島木邦子 末松節子 田中実雄 田中すま子 田中千津子 塚内トシエ 西松光子
 西松義高 西村チエ子 春本ちづる 屏 悦子 屏 鹿治 屏 光義 本田久代
 三井恭子 森本豊美 森山和歌子 森脇世津子 山縣 栄 山下美代子 吉兼美智子

調査にあたって、下記の方々にご指導、ご教示をいただきました。記して感謝の意を表します。

伊崎俊秋 石田 孝 石野博信 磯村幸男 出宮徳尚 伊藤昌広 梅崎恵司
 太田幸博 緒方 泉 岡村道雄 小田和利 亀田修一 辛嶋眞治 辛嶋智恵子
 川辺昭人 北垣聡一郎 木下 修 木下 良 木村達美 木本雅康 葛原克人
 栗原和彦 小池史哲 兒玉眞一 坂井秀弥 狭川真一 島津義昭 末永弥義
 杉原敏之 須原 緑 高田昭人 田中俊明 田中正日子 坪井清足 飛野博文
 西谷 正 中原 博 中村修身 乗岡 実 橋口達也 前角和夫 増渕 徹
 松尾洋平 水野正好 水ノ江和同 宮本一夫 向井一雄 村上幸雄 八巻孝夫
 柳田康雄 矢野和昭 横田賢次郎 横田義章 李 進熙 渡辺正気

Ⅱ 位置と環境

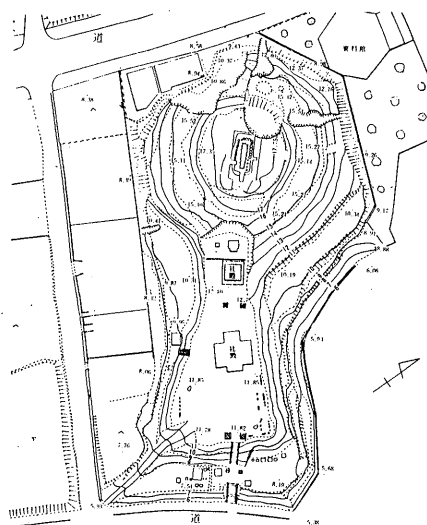
御所ヶ谷神籠石は行橋市津積、勝山町大久保、犀川町木山の一市二町にわたって広がっている。九州には12の古代山城が分布するが、御所ヶ谷神籠石は豊前国で唯一確認されている古代山城である。豊前国は現在の福岡県東部と大分県北部を占め、御所ヶ谷神籠石はその北部、周防灘に面した京都(行橋)平野に位置する。平野の南西部に位置する飯岳山(573m)から東方に飯岳地塊列と呼ばれる低い山なみが連なるが御所ヶ谷神籠石はこの一角、ホトギ山(御所ヶ岳246.9m)の主として北西斜面に立地しその城域は旧京都、仲津両郡にまたがっている。

平野内の遺跡は弥生時代前期末から中期頃より急増し、前田山遺跡⁽¹⁾、下稗田遺跡⁽²⁾などの大規模な集落や集団墓も営まれた。近年、豊津町徳永川ノ上遺跡⁽³⁾で銅鏡や鉄器、玉類を副葬する墳丘墓も確認されている。しかし平野全体の青銅器の所有量は福岡平野などと比較すると少なく、弥生時代における政治的結集度は必ずしも大きくなかったことがうかがえる。

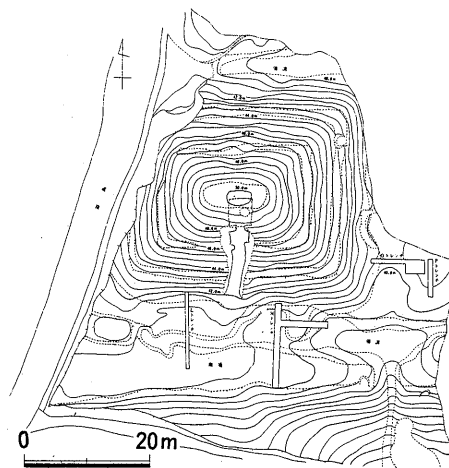
古墳時代になると京都平野を基盤とする豪族は豊前地域のなかでも相対的に大きな力を持つようになる。まず平野の北側の京都郡の沿岸部に3世紀末ないし4世紀初頭、現存7面の三角縁神獣鏡を有す石塚山古墳⁽⁴⁾が出現する。以来、御所山古墳⁽⁵⁾、八雷古墳⁽⁶⁾、庄屋塚古墳などの豊前地域最大級の前方後円墳の多くが旧京都郡域に築かれている。

磐井の乱の後、安閑天皇2(535)年には豊前北部地域に5つの屯倉が設置され大和朝廷による直接支配が強化されていく。これと符合するように6世紀中葉には小地域首長も前方後円墳を築造するようになり、平野の小地域ごとに30~40m級の小型の前方後円墳が出現する。時を同じくして群集墳の築造も本格化し、平野内の丘陵部には多数の群集墳や横穴墓群が分布する。6世紀後半には前方後円墳の築造は終息をむかえ、6世紀の末から7世紀にかけて九州屈指の大型横穴式石室を有す橋塚古墳(方墳)、綾塚古墳(円墳)などが築かれた。同じころ仲津郡にも新興勢力の台頭を物語るように、彦徳甲塚古墳と甲塚方墳⁽⁷⁾が築造されている。この両墳の北側の丘陵では1000基以上の横穴墓から成る竹並横穴墓群⁽⁸⁾が調査されている。

7世紀後半から8世紀にかけて、畿内の影響のもと、九州にも仏教寺院が盛んに建立されるようになる。その中でも初期の寺院はまず筑前、豊前地域に多くみられる。京都郡では、8世紀前半までに椿市廃寺⁽⁹⁾が、仲津郡に上坂廃寺、木山廃寺が創建されるが、これらは京都、仲津郡の郡司層の建立と考えられる。これらの寺院は朝鮮半島系の瓦を創建瓦とするが、このことは



第2図 石塚山古墳 (S = 1 / 2,000)



第3図 甲塚方墳 (S = 1 / 1,200)



第4図 周辺遺跡分布図 (1/80,000)

1. 御所ヶ谷神籠石
2. 石塚山古墳
3. 番塚古墳
4. 御所山古墳
5. 谷遺跡
6. 神後古墳
7. 黒添メウ塚古墳
8. 徳永丸山古墳
9. 徳永泉古墳
10. 願光寺裏山古墳
11. 椿市廃寺
12. 下崎ヒガデ遺跡
13. 前田山遺跡
14. 八雷古墳
15. 下稗田遺跡
16. 寺田川古墳
17. 庄屋塚古墳
18. 橘塚古墳
19. 綾塚古墳
20. 扇八幡古墳
21. 箕田丸山古墳
22. 菩提廃寺
23. 大谷車掘遺跡
24. 天生田矢萩遺跡
25. 長井遺跡
26. 石並古墳
27. 崎野遺跡
28. 隼人塚古墳
29. 徳永川ノ上遺跡
30. ヒメコ塚古墳
31. 竹並横穴墓群
32. 甲塚方墳
33. 彦徳甲塚古墳
34. 惣社古墳
35. 豊前国府
36. 豊前国分寺
37. 徳政瓦窯跡
38. 豊前国分尼寺
39. 上坂廃寺
40. 福六瓦窯跡
41. 木山廃寺
42. 姫神古墳
43. 上大村古墳
44. 大熊古墳
45. 本庄古墳
46. 宇土窯跡
47. 茶臼山東窯跡群
48. 堂がへり窯跡群

大宝2(702)年の豊前国戸籍帳にも見えるように、6世紀以降豊前地域に進出してきた渡来系氏族秦氏とその管掌下にあった部民集団が多数居住していたことと関係するのであろう。これらの渡来系集団が神籠石の築造において果たした役割にも興味を引かれる。

8世紀半ばには仲津郡に豊前国分寺が建立され、このころには豊前国府も設置されていたと考えられ、当地域は名実ともに豊前国の中核としての機能を果たすことになる。

『延喜式』所載の駅家名によって推定される大宰府から豊前国府を経て宇佐へ向かう西海道の古代官道は御所ヶ谷神籠石の北麓を東西に走る。現在でも丘陵部に切り通しとして痕跡をとどめているが、1998年に圃場整備事業にともない実施した大谷車堀遺跡の調査でも道路の痕跡が確認された。

一方、神籠石の南麓も古くより筑前と豊前を結ぶ重要ルートであり、御所ヶ谷神籠石の位置はこの南北の重要ルートを押さえるうえで格好の立地といえる。御所ヶ谷の南麓の集落には木山(キヤマ)の地名が残るが、おそらく城(キ)山が転化したものであろう。

長峽川、今川、祓川の河口の現市街地は平安時代頃まで現在と景観を異にしており津熊付近までは入江であったと考えられている⁽¹²⁾。ここには畿内と九州を結ぶ瀬戸内航路の要港、草野津(行橋市草野付近)があった。

以上のように御所ヶ谷神籠石は古代豊前地域の中核を眼下に睨み、筑前から豊前を経て瀬戸内海へ至る重要なルートを扼する要衝に位置することがわかる。大規模な古代山城が、この地に築かれた背景には以上のような地理的、歴史的条件が存在した。



第5図 椿市廃寺出土瓦



第6図 豊前国府跡

註

- (1) 行橋市教育委員会『前田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第19集 1987
- (2) 行橋市教育委員会『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書第17集 1985
- (3) 福岡県教育委員会『徳永川ノ上遺跡』椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告7 1992
- (4) 荏田町教育委員会『石塚山古墳発掘調査概報』荏田町文化財調査報告書第9集 1988
- (5) 荏田町教育委員会『史跡御所山古墳保存管理計画策定報告書』1976
- (6) 行橋市教育委員会『八雷古墳』行橋市文化財調査報告書第14集 1984
- (7) 豊津町教育委員会『甲塚方墳』豊津町文化財調査報告書第13集 1994
- (8) 竹並遺跡調査会『竹並遺跡』1979
- (9) 行橋市教育委員会『椿市廃寺』行橋市文化財調査報告書第8集 1980
行橋市教育委員会『椿市廃寺Ⅱ』行橋市文化財調査報告書第24集 1996
- (10) 豊津町教育委員会『史跡豊前国分寺跡』豊津町文化財調査報告書第16集 1995
- (11) 木下 良「西海道の古代官道について」『大宰府古化論叢』上巻 1983
- (12) 千田 昇「前田山遺跡周辺の地理的環境」行橋市教育委員会『前田山遺跡』1987所収

Ⅲ 遺跡の概要

御所ヶ谷山中の石塁や礎石群の存在は江戸時代から知られており、元禄7年(1694)の貝原益軒の『豊国紀行』にも記されている。その後、伊藤常足(『大宰管内志』)、西田直養(『柳村雑記』『笹舎漫筆』)、高田吉近(『豊前国志』)、渡辺重春(『豊前志』)らがこの遺跡について言及しているが、その多くはこの遺跡を『日本書紀』に見える景行天皇の長峽県(長門)の行宮と考えていた。(伊藤常足はこれに否定的)

この遺跡を神籠石遺跡の一つとして認識されたのは明治41年(1908)のことで、学界に紹介したのは伊東尾四郎⁽¹⁾である。伊東は明治43年(1910)1月、喜田貞吉らとともに御所ヶ谷神籠石を踏査し、新たに門や列石を確認している⁽²⁾。その後昭和初期に文化財指定申請のため遺構の実測調査が行われた。

昭和40年代から近年にかけては小田富士雄⁽³⁾、定村貢二⁽⁴⁾、石田孝⁽⁴⁾、向井一雄⁽⁵⁾らによる踏査で新たな門跡や列石などが発見されていった。

平成3年度より市教育委員会としても史跡の実態把握のための分布調査と航空写真測量による遺跡の千分の一地形測量図を作成し、平成5年度から、発掘調査に取り組んでいる。

御所ヶ谷神籠石は行橋市と犀川町の境をなす標高200m前後の尾根線の北斜面に広がる。城内最高所は南東端のホトギ山で、標高246.9m。北側に位置する西門は標高は65mで南北の比高差はかなり大きい。外郭線は約3kmで、北側に開く大きな二つの谷を城内に取り込んだ典型的な包谷式山城である。

外郭線は尾根稜線よりやや下がったところに土塁を巡らし、谷には排水機能を備えた石塁を築く。土塁は概ね幅約7m。高さは城外側で約5mである。土塁線の平面プランを巨視的に見ると、地形を巧みに取り入れ、直線を屈折させながら連ね、凹凸が多い。

7箇所⁽⁶⁾の城門は谷間に築かれる大規模なもの⁽⁷⁾と稜線上に設けられた小型のものに分けられる。大規模な城門は、北に開く2つの谷に築かれた中門と西門である。

中門は谷を約30mほど石塁で塞ぎ、東側に幅6mの城門を設けている。現在、城門部分には溪流が流れ門礎等は不明である。城門の西側の石塁は長さ約18mで高さは約7m。二段に築造された石塁の下段に通水用の石樋を突出させた構造は朝鮮式山城の城門のなかでも異彩をはなつ。石積は横長の石材を目地をずらしながら積み上げる堅緻な布積である。石塁上部に重箱積の箇所がみられ部分的に積み直された可能性がある。

西門は、谷間を約40mにわたり石塁で遮断した遺構が残る。石塁の崩壊が著しく城門の規模、構造は不明である。西門の石塁には中門のような段築はない。石築の手法も立法体形の石材を多用する重箱積で中門とは異なる。こうした構築法の違いや石積に列石石材が転用されていることから西門を後世の築造とする見解もある⁽⁶⁾。

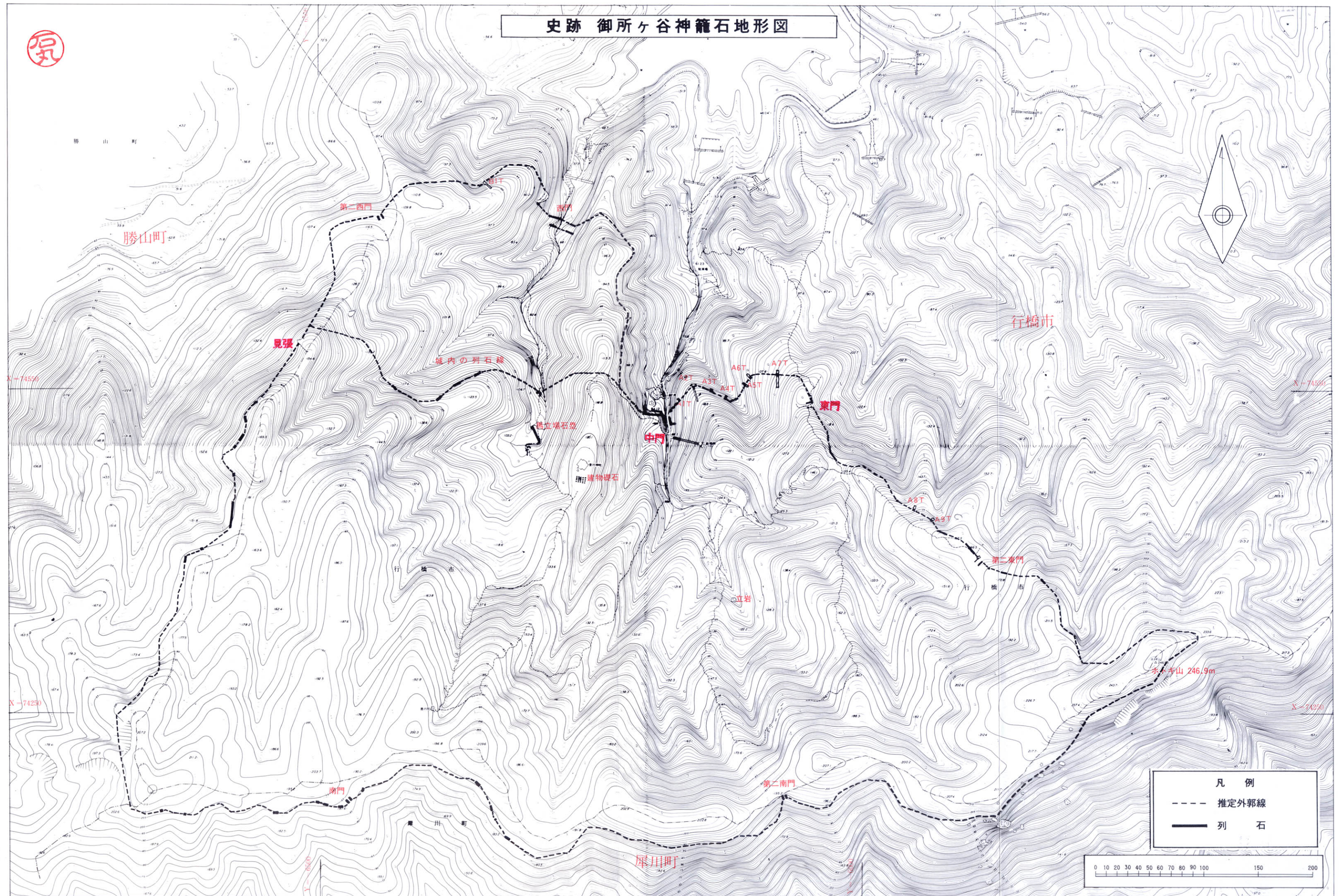
城の防御正面であるこの二つの城門は攻撃側と防御側との比高差が大きく、また城門の左右の土塁が城外に張り出し、迫る敵兵に左右から弓矢な



第8図 西門跡



史跡 御所ヶ谷神籠石地形図



第9図 御所ヶ谷神籠石地形測量図 (1/3,000)

どで効果的に攻撃できるように設計されている。
稜線上に設けられた小型の門は、いずれも幅
3.6m前後で一定の企画性が認められる。

城内にも以前から知られるいくつかの遺構が
ある。

城内中央を南北に伸びる尾根の削平地に3間
×4間の総柱建物1棟分の礎石がある。これは
九州の神籠石式山城で知られる唯一の礎石建物
であるが、江戸時代には景行天皇の行宮跡と考
えられ、礎石の中央に景行天皇を祀る石祠がた
てられている。

礎石に神籠石の列石を転用したものがみられ
ることや、九州の神籠石で礎石の確認例がない
ことから中世山城関係の遺構ではないかともい
われてきたが、十分な根拠があるわけではなく、
平成8年度に実施した礎石のトレンチ調査でも
須恵器片や土師器片が出土したが中世説を裏付
ける資料は見いだされていない。

礎石のある丘陵の西側の谷には通称、馬立場
と呼ばれる割石積みの石塁遺構がある。これも
従来、漠然と中世の遺構といわれていたが、類
似する石積が中門背面にも見られ、古代山城に
ともなう遺構である可能性が高い。

また定村責二らにより城内でも列石群が確認
され、それ以後、御所ヶ谷神籠石は一部、塁線
が二重に巡ると認識されてきた。この列石群に
ついては平成7年度に分布調査を行った結果、列石は中門の付近から西にのび西側外郭線の通
称「見張」と呼ばれる巨石付近まで約340mにわたり点々と続いていることがわかった。



第10図 東門跡



第11図 建物礎石



第12図 馬立場の石塁

註

- (1) 伊東尾四郎「豊前京都郡の神籠石及石門に就きて」『歴史地理』第11巻第5号 1908年
- (2) 宮崎栄雅「豊前国御所ヶ谷神籠石探検記」『歴史地理』第15巻第3号 1910年
- (3) 定村責二「御所ヶ谷神籠石」『北九州瀬戸内の古代山城』1983年
- (4) 石田孝「神籠石は祭祀施設である」『筑紫』第91号 1981年
- (5) 向井一雄「御所ヶ谷山城 新発見遺構について」『溝婁』2 1992年
- (6) 石田、註4前掲論文
- (7) 定村、註3前掲論文

Ⅳ 調査の概要

1. 調査区について

本書で報告するのは御所ヶ谷神籠石の外郭線の調査の概要である。

御所ヶ谷神籠石の外郭線については先学の踏査によりいくつかの図面が作成されている⁽¹⁾。また市教育委員会でも保存管理計画策定にともない平成3年度に千分の一の図面を作成した⁽²⁾。しかし御所ヶ谷の外郭線は深い藪に覆われた部分が多く、列石も多くが埋没していたことから、踏査によって外郭線を確認することには限界があった。外郭線を確認するためには土塁線の伐採と部分的な発掘調査が必要となった。平成5年からの発掘調査は、推定外郭線のうち行橋市域に属する部分約1.1kmを対象とした。まず部分的に露出した列石や地形を手掛かりに推定した神籠石の外郭線を伐採しこれを確認するために列石の未露出部分の要所にトレンチを設定した。調査対象とした推定外郭線は中門を基点に東西に分け東側をA区、西側をB区とし、トレンチ番号にそれぞれのアルファベットを冠した。

中門より東側には12箇所。西側には2箇所のトレンチを掘削した。トレンチは列石の確認のため主として土塁の前面に設定したがA2、A7トレンチでは土塁の後方まで延長し土塁の背後の状況を確認した。



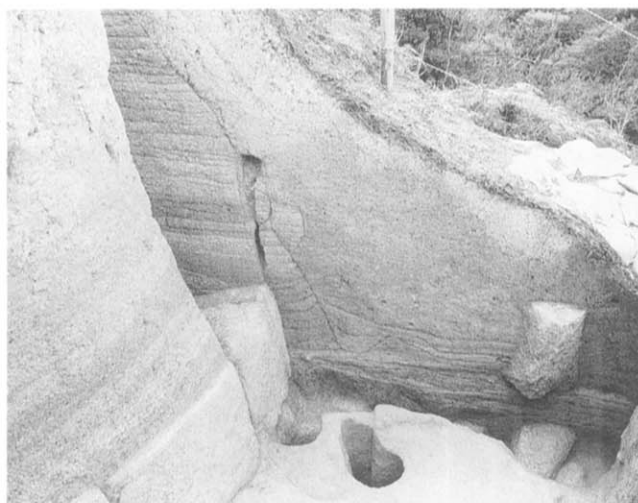
第13図 土塁線の調査状況

2. A2トレンチ

A2トレンチは中門の東北約40mの土塁が屈曲する部分に設定した。土塁の前面には土塁の崩落土が厚く堆積していたがそれを除去すると残存する版築土塁が現れた。

土塁前面から背面の石組みまでの基底部幅7.5m、前面の整地面から現在の土塁の頂部までの高さ4.8mを測る。

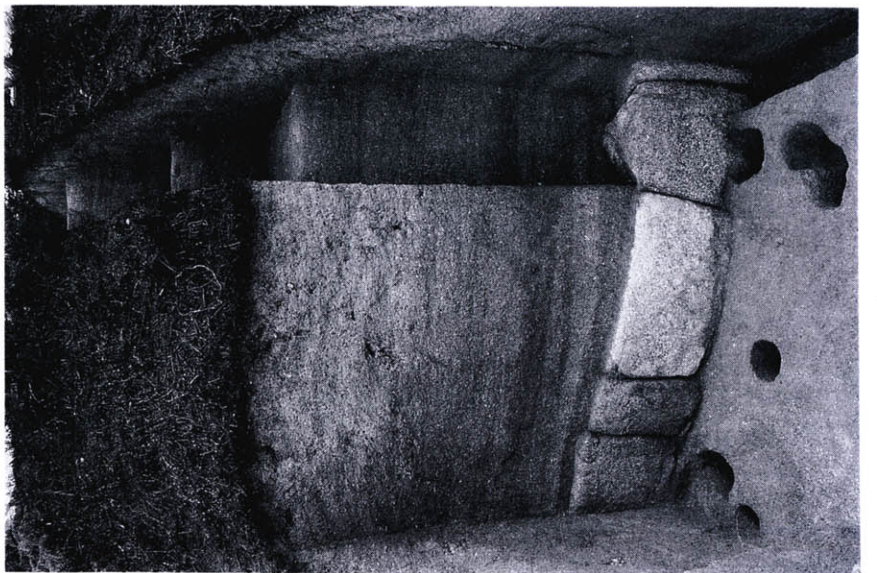
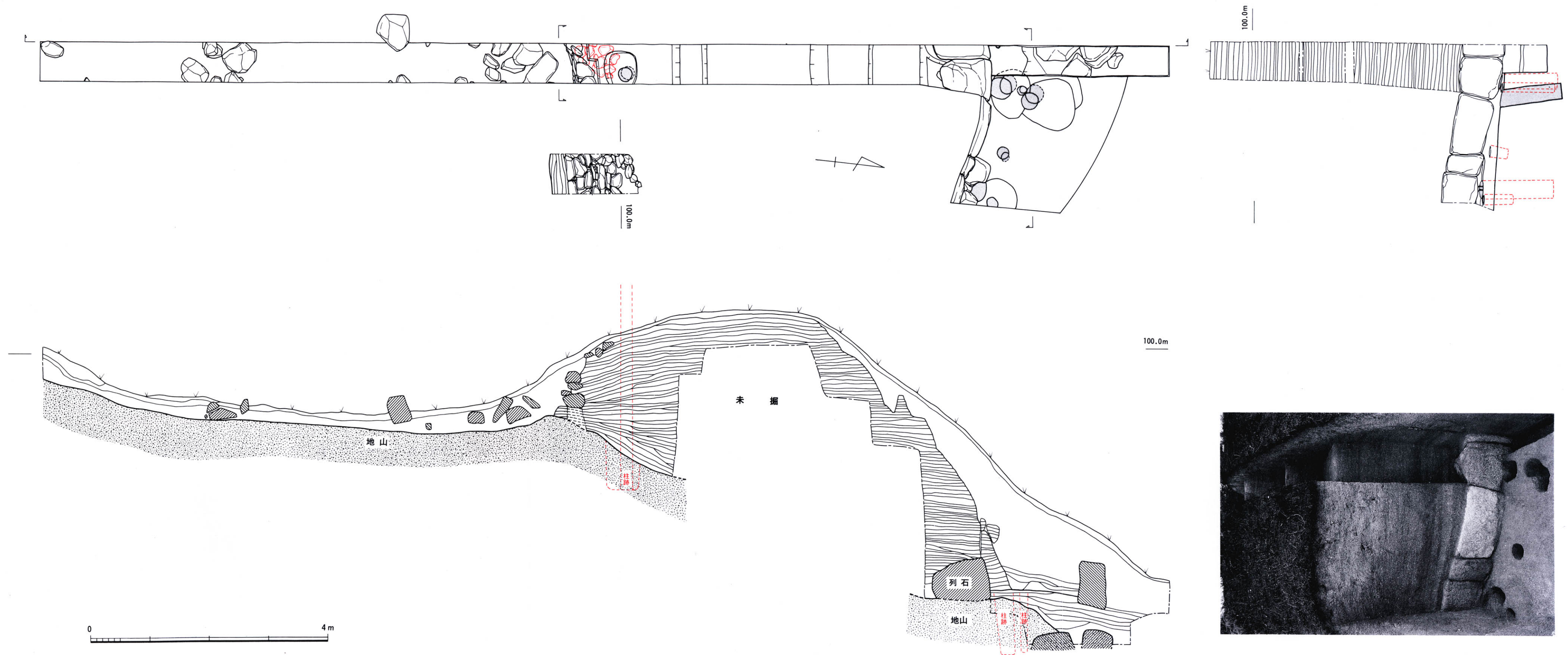
列石は土塁の屈曲に沿って弧を描いて連なっており、いわゆる「折れ」はここでは認められない。



第14図 列石と版築土塁

列石の城外側に版築状に築き固められたテラスが造成される。列石の前面は平滑に仕上げられるがテラス部分で覆われた下部が粗割りの状態が残ることから、この加工は列石を配置しテラスを造成した後になされたものとみられる。

テラス部分で6個の柱穴とその掘り方が検出された。柱穴は列石に沿って二列に並ぶ。列石



第15図 A 2 トレンチ平面・断面図 (1/50)

寄りの2個柱穴は、径約30cm、柱間は180cm。その外側に直径20cm前後のやや小さい柱穴が3個並ぶ。外側の列の柱穴は列石寄りの柱のおおむね半分の間隔で配置される。柱はやや列石方向に傾いて立てられている。A2トレンチではこれとは別に変則的な柱穴が一個検出されている。

土塁の断面を見ると土圧によるずれが生じているものの版築土は列石を覆い列石寄りの柱にまで達している。こうした状況をみる限り版築の堰板は列石寄りの柱の背面に取り付けられたと考えざるえない。外側の短い間隔で並ぶ小型の柱は堰板の押さえの支柱や版築工事の際の足場の支柱などといった用途が考えられるがまだはっきりしない。

工事後、列石は版築土に覆われて完全に隠れ、また列石寄りの支柱も版築土塁に埋め込まれた状態で残されたと考えられる。この柱を土塁上に突出させれば姫垣の支柱として利用することもできる。外側の列の柱は工事後撤去されたのだろう。

柱穴は土塁の前だけでなく背面に近い土塁中からも検出された。後ろの柱は前面の版築工事の支柱に連結し、前面の支柱が版築の土圧で傾くことを防ぐためのものであろう。

版築の積み土の一層の厚さは3cmから12cm。土塁前面の壁面で82層の版築土層が観察された。積み土には地山の花崗岩バイラン土が用いられ、粒子の粗い土と細かい土が数層ずつ交互に積まれる。基底部から1mくらいの高さまでは花崗岩を砕いたような土を用い、特に入念につき固められており、手鋤で掘削した際、火花を生じるほどに強固に締まっていた。

A2トレンチ周辺では土塁の背面には割石を積み上げた石組がみられる。版築の土層はこの石組みまで伸びており堰板の痕跡などは認められない。



第16図 列石前面の柱穴



第17図 A2トレンチ(土塁後方から)



第18図 土塁中の柱跡



第19図 土塁背面の石組

3. A7トレンチ

A7トレンチは東門から土塁に沿って50mほど西側に設けたトレンチである。

現存する版築土塁の幅は現存7.2m、高さ4.8m。A2トレンチ同様、土塁の前面上部はかなり崩壊しているが土塁基底部から1.6mほどまでは上部の崩落土に覆われ、本来の土塁壁面の姿を良くとどめている。土塁壁面の立ち上がりは75度前後に復元できる。

版築の積み土は花崗岩バイラン土で一層の厚さは3cmから厚いところで18cmである。粒子の粗い土と細かい土を交互に積み、基底部から高さ1mまでがとくに固くしまる。土塁前面で積み土は86層を数える。

列石前面の整地層にはA2トレンチと同じような2列の柱穴が認められる。列石寄りの柱穴は径25cm、深さ1.2m前後である。外側に位置する柱穴は径20cm前後、深さ30～40cm前後で柱間約1mで検出された。

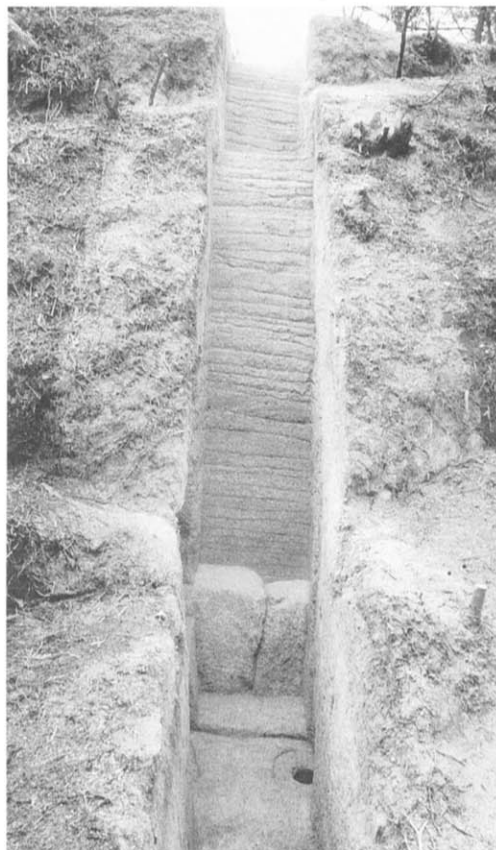
このトレンチでは版築土が列石と土塁を覆った状態が明瞭である。

列石寄りの柱は版築の壁面より内側に立っており、築垣の須柱のように柱の大半が土塁に埋め込まれていたようである。このため版築工事の堰板を外側から支える柱ではないことがわかる。

外側の小型の柱が堰板の外側の支えとも考えられるが堀込みが浅く、これだけでは支柱としての安定性をやや欠くように思える。

後方土塁中からも径20cmほどの柱穴が検出されている。A2トレンチで見られたものと同様の工事事用支柱と考えられる。

土塁の後ろでは版築土はそのまま地山に当てて処理しており、A2トレンチのような石組みは認められない。土塁背後の地形はやや低くなっておりこの辺りから東門にいたるまで、通路状の空間が形成されている。



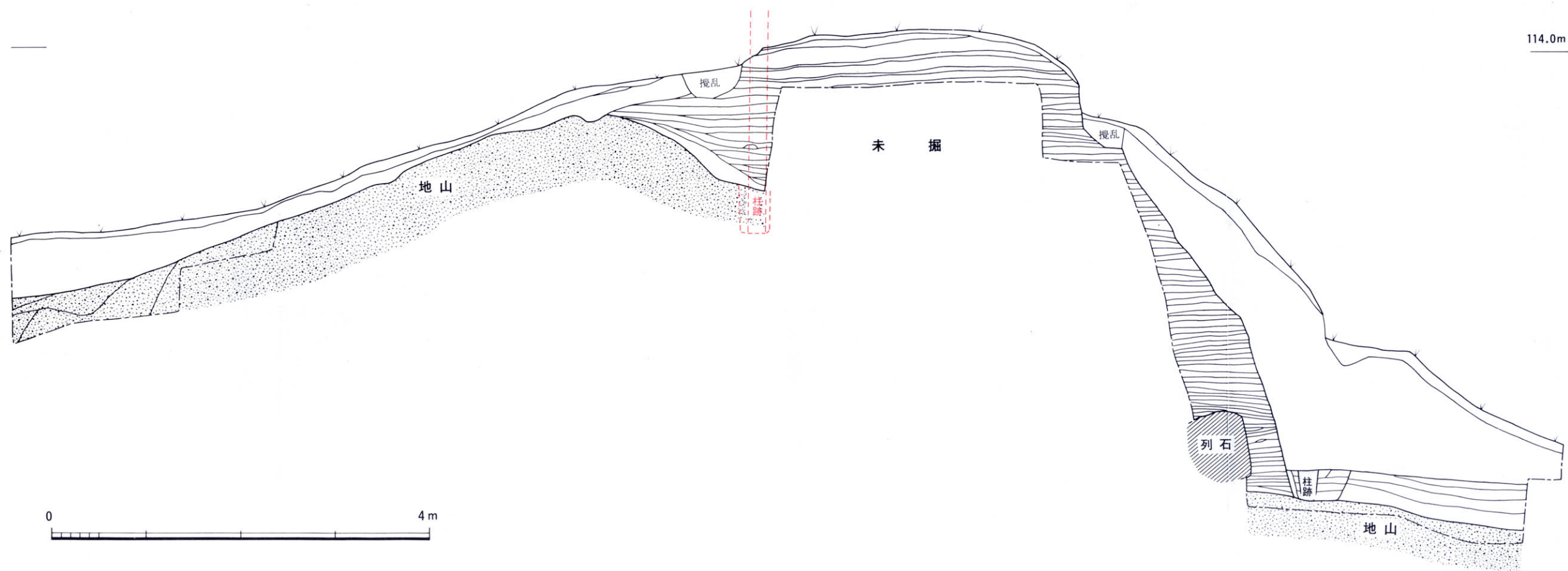
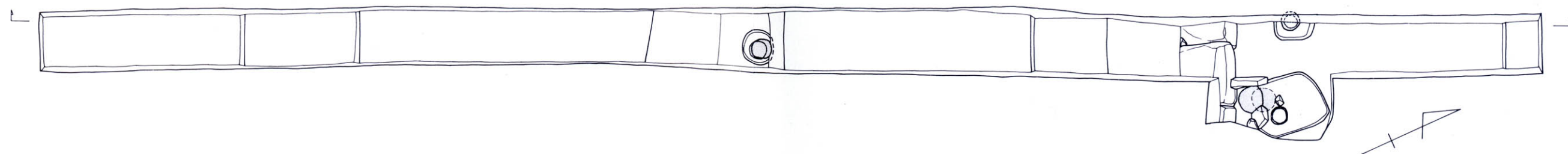
第20図 列石と版築土塁



第21図 列石を覆う版築土塁



第22図 列石と前面の柱穴



第23図 A 7 トレンチ平面・断面図 (1/50)

4. B1トレンチ

B1トレンチは西門から土塁に沿って120mほど西に向かった地点である。ここでは土塁を断ち割るようなトレンチ掘削はせず、土塁が崩壊した場所を調査地点に選び、崩落崖面を削って版築土塁断面の状況を観察した。このため断面は土塁に対して正確に直交するものではないが、現存幅7.6m、高さ4.5mほどの版築土塁と柱跡を確認した。

土塁は版築を山側の地山にすべてぶつける典型的な内託構造である。地山には階段状の削平が認められるが、版築作業のための処置であろう。

版築の積み土は花崗岩バイラン土で厚さは3cmから10cm。土塁断面で基底部から数えて82層の版築土塁が観察された。

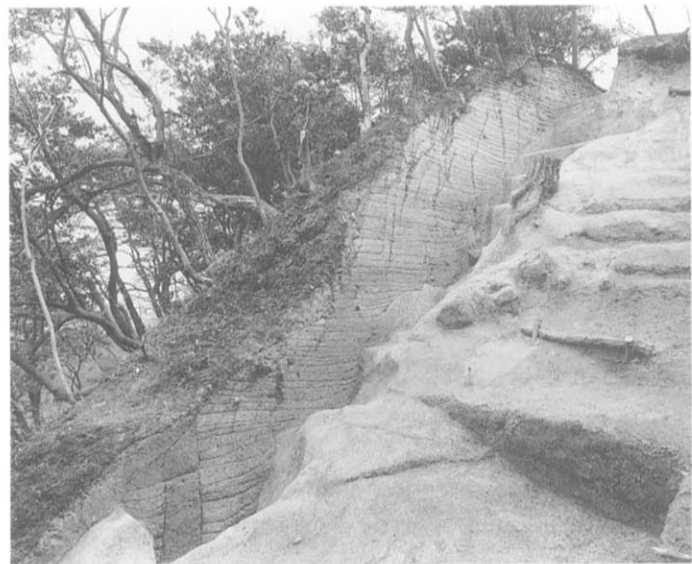
土塁の前面基底部には方形の掘り方が掘られ、これにともなう径30cmほどの柱跡1が検出された。この柱は版築工事の支柱と考えられるが堰板の取り付け方法などは明確ではない。

柱跡はわずかに内傾する。本来の土塁壁面の傾斜は崩壊で判然としないが柱跡の傾きを壁面の傾斜と考えると、立ち上がり85度のかなり急傾斜の土塁となる。

この地点の土塁の特筆すべき点は神籠石の特徴である切石を全く欠くことである。土塁の前面基部の版築層の断面からも列石が欠落したのではなく、当初より置かれてないことは明瞭である。



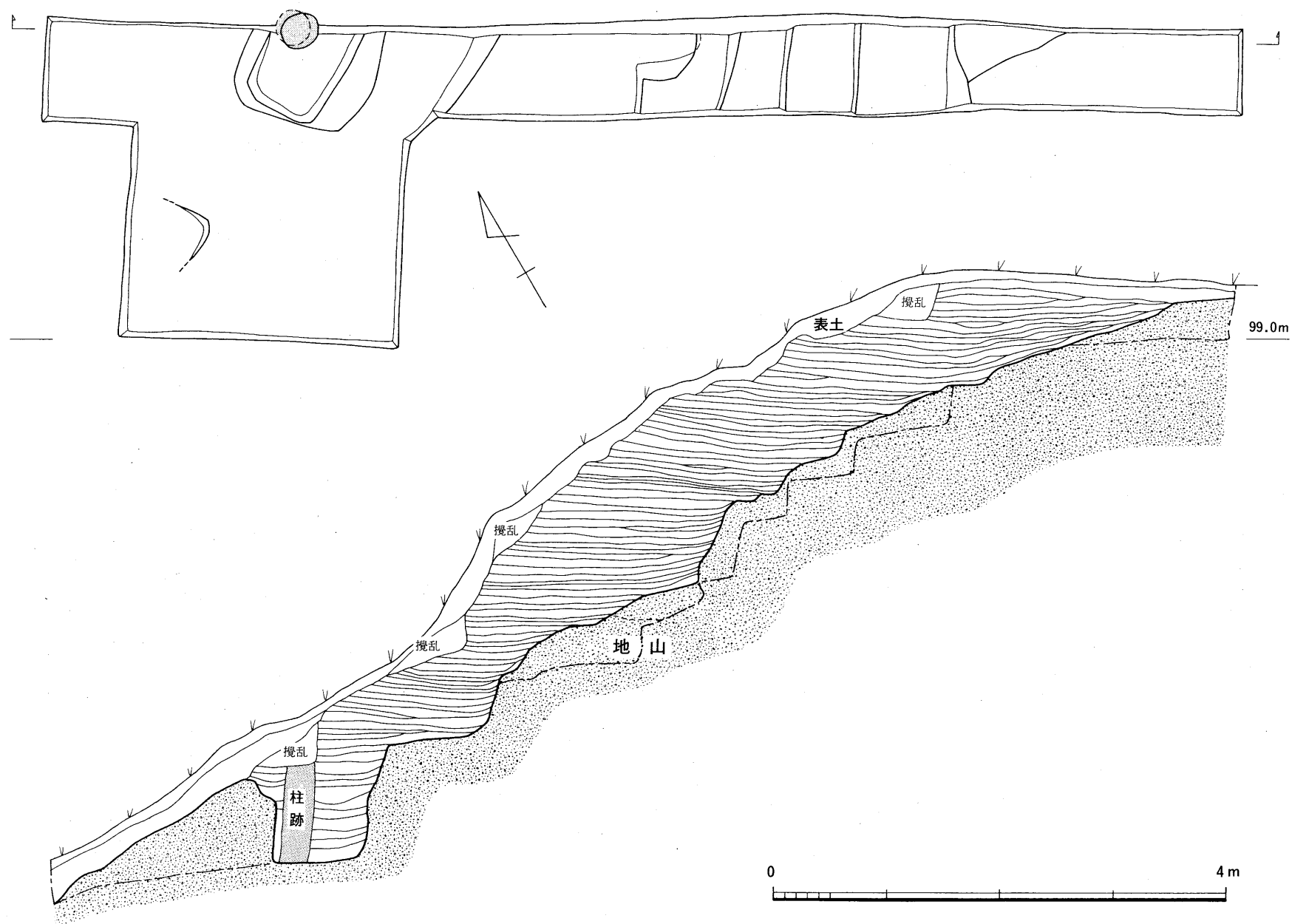
第24図 B1トレンチ(西から)



第25図 版築土塁の断面



第26図 柱跡と掘方



第27図 B1トレンチ平面・断面図(1/50)

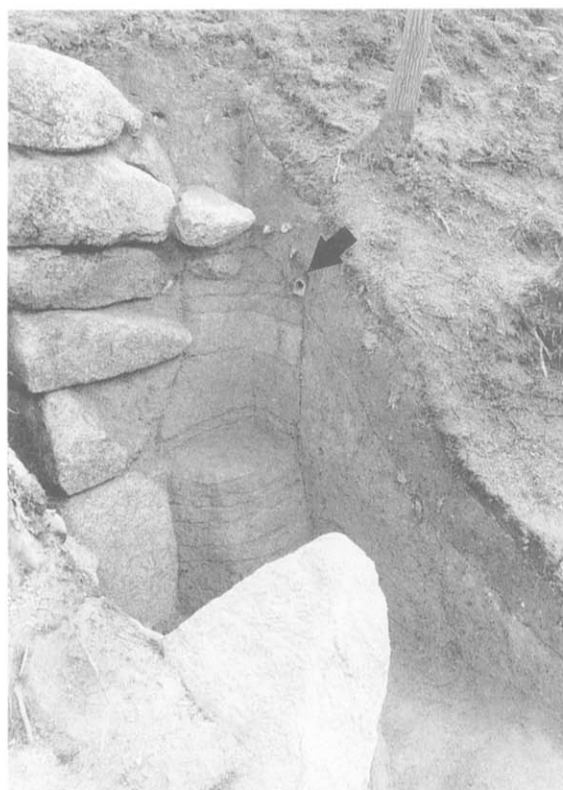
5. 出土遺物について

御所ヶ谷神籠石調査は、外郭土塁線の調査が中心であったこともあり、現在までの出土遺物は極めて少ない。図示した遺物は須恵器の長頸壺の口縁部から頸部にかけての破片で、第2東門の城門右袖に設けたトレンチから出土した。遺物の破片状況と出土状況から土塁築造時に、つき混まれたものではなく土塁上部にあったものが土塁崩落時に混入した可能性が高い。

口縁部は4分の1ほど残存し、口径10.5cmに復元できる。頸部はやや開き気味に立ち上がる。

口縁部を外方にはほぼ直角に折り曲げ、端部をわずかにつまみ上げる。頸部は本体に差し込んで接合する。頸部には櫛目が施され、中位に二条の沈線が巡る。色調は灰色で、焼成は良好である。

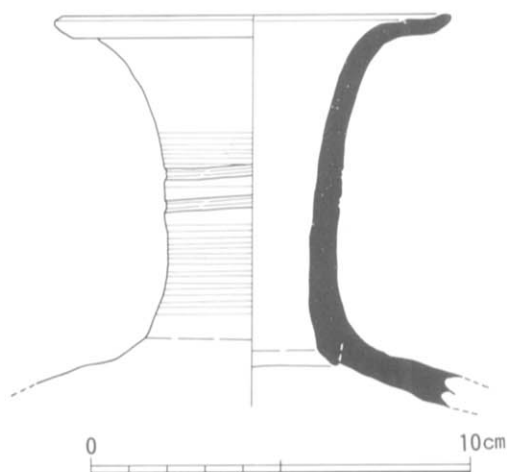
このタイプの長頸壺は、大宰府では7世紀第4四半期に編年されるが、御所ヶ谷のものは、折り曲げられた口縁の幅が広くやや雰囲気を変える。生産地は特定できていないが豊前地域の窯で焼かれた可能性が高い。このため大宰府出土のものと同時期とするのはややためらわれるが、7世紀後半のものと考えて大過あるまい。



第28図 須恵器出土状況(第二東門)



第29図 出土須恵器



第30図 出土須恵器実測図

註

(1) 定村貢二「御所ヶ谷神籠石」『北九州瀬戸内の古代山城』1983

石田 孝「神籠石は祭祀施設である」『筑紫』第91号 1981

向井一雄「御所ヶ谷山城 新発見遺構について」『溝婁』2 1992などがある

(2) 行橋市教育委員会『史跡 御所ヶ谷神籠石保存管理計画策定報告書』行橋文化財調査報告書 第21集 1993

V おわりに

御所ヶ谷神籠石の調査は平成9年度で5年目になるが、保存を前提とした確認調査という意味で最小限のトレンチ調査にとどめてきたこともあり、神籠石全域からみると調査範囲はごく小面積にすぎない。それでも調査以前には想像しえなかった神籠石式山城の姿を徐々現しつつある。それぞれの遺構については、なお補足調査を必要とする部分を残しているが、これまでの調査成果の概略と今後の課題を記し本書のまとめとしたい。

1. 遺跡の範囲

これまでの調査の第一目的は遺跡の範囲の確認であった。これは現在の部分的な史跡指定範囲を拡大して遺跡の保存をはかるためにも必要不可欠な作業であった。発掘調査を実施したのは行橋市域だけであるが、犀川、勝山両町域についても分布調査を重ね、御所ヶ谷神籠石の外郭線をほぼ把握することができた。

御所ヶ谷神籠石の外郭線のうち、地形が急峻で天然の要害を形成している南尾根の第二南門からホトギ山山頂周辺にかけては土塁や列石がほとんど確認されていない。こうした部分には当初から土塁が築かれなかった可能性が高い。御所ヶ谷ではこのように土塁が城域を完周していないが、自然の要害を利用した部分を含めると外郭線の全周約3 km、城内面積は約345,000 m²と考えられる。

2. 土塁の構造

御所ヶ谷神籠石では、九州の他の神籠石式山城と様相を異にする点がいくつか認められる。

まず土塁の高さであるが、九州の多くの神籠石式山城の土塁が高さ2～3 mであるのに対して御所ヶ谷では4.5～4.8 mとかなり高く、堅固な城壁が形成されていたことがわかった。

土塁前面には約1.8 mと0.9 mスパンで前後2列に柱穴が並び、背面に近い土塁の中からも柱跡が検出された。版築工事に関係すると考えられるこれらの柱が、他の神籠石式山城より短い間隔で数多く立てられているのは、築かれる版築土塁の高さと関係するのかもしれない。

また、これまで九州の神籠石式山城の列石は土塁前面に露出すると考えられてきたが、御所ヶ谷ではこれまで調査したすべてのトレンチで土塁の版築が列石を被覆し、内側の柱を包み込む位置まで達していることが確認された。山口県の石城山神籠石⁽¹⁾、岡山県の大廻小廻山城など瀬戸内の古代山城で列石を被覆した事例が報告されている。御所ヶ谷の場合、列石設置後に前面を丁寧に敲打調整し、さらに前面上端部が揃うように神籠石特有の加工が施されていることから、最終段階で列石の前面まで版築を削り落とし、石を露出させる計画だったのかもしれない。

さらに列石を、全く使わずに築かれた版築土塁も確認されている。列石は土塁を強化し土塁の崩壊を防ぐ機能を有したと考えられるが、これを省いても今回報告したB1トレンチのように他の土塁と同様の高さ4.5 mの版築土塁を築くことは可能であった。列石の設置を取り止めることにより、石材の切り出し、運搬、加工などに要した相当な労力と工期が節減されたに違いない。今のところ外郭線の北西部分、西門の東西数百メートルの土塁に列石が使われていないものと考えられている。列石のない土塁は、西門城内側に未完成列石群が連なることや西門に列石石材が転用が認められることなどから、御所ヶ谷の外郭線のなかでも最後に築かれたものと考えられる⁽³⁾。

3. 今後の課題

これまでの研究では官選史書に記事のある白村江の敗戦(663年)後に築かれたいわゆる朝鮮式山城と、それ以外の山城は漠然と区別されて考えられてきた。しかし岡山県の鬼ノ城で大野城や基肄城のものと同一タイプの半円弧状の削り込み式の掘立柱門礎や対馬の金田城に見られるような角楼⁽⁵⁾が確認された。さらに御所ヶ谷においても大野城と同様の列石を用いない土塁が確認されたことは、これら二種類の山城は構造的にも重なる部分が多いことがわかってきた。こうしたことから、築造時期についてもかなり接近あるいは一部重複していることも考えられる。くわえて御所ヶ谷において列石を使用した土塁が未使用の土塁に先立つものとするならば土塁に切石列石を用いる神籠石式山城は白村江以降の築造された山城にやや先行して築かれた可能性が高いといえる。

第二東門のトレンチ出土の須恵器により、遅くとも7世紀の後半には御所ヶ谷神籠石は築かれていたと考えられるが築城の上限についてはさらに資料の蓄積を待たねばならない。

版築の方法についても他の神籠石式山城に見られない新たな事例を確認できたが、列石前面などをさらに広く調査し、それぞれの柱の具体的役割を検討していく必要がある。

城門の調査や城門の建物の探索も残された課題といえる。

御所ヶ谷神籠石の調査結果は従来の朝鮮式山城、神籠石式山城の枠組みを一度取り払って純粹に城の構造から一連の古代山城の築造年代などを考察していく必要性を提起している。遺跡の範囲が確認された今後は保存整備を視野に入れ調査を継続していく必要があろう。

註

(1) 小野 忠熙「石城山神籠石」『北九州瀬戸内の古代山城』1983

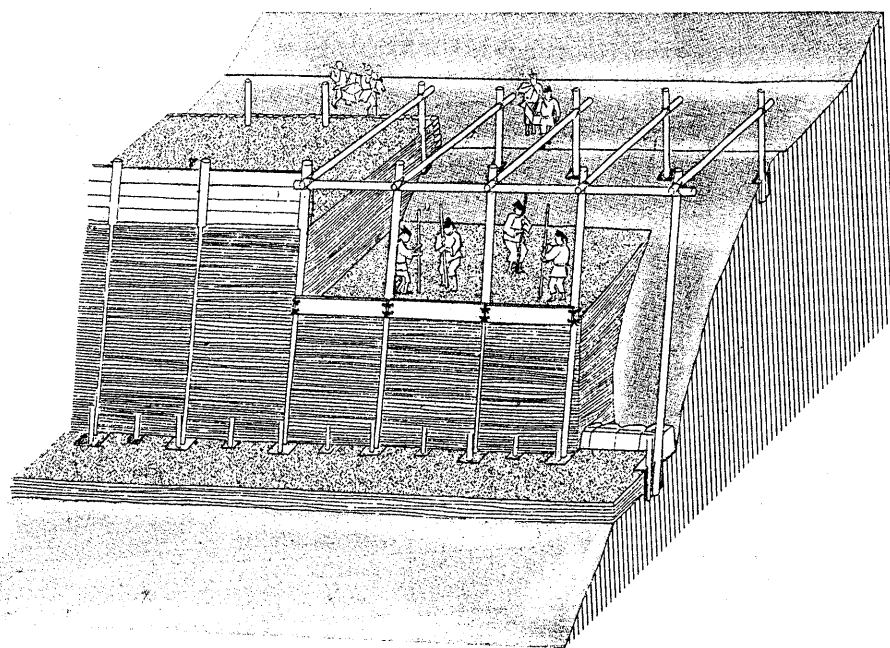
(2) 岡山市教育委員会『大廻小廻山城跡発掘調査報告』1989

(3) 小川 秀樹「豊前・御所ヶ谷神籠石」『古代文化』第47巻12号 1995

「御所ヶ谷神籠石」『別冊歴史読本 城郭研究最前線』1996

(4) 総社市教育委員会「鬼城山第1城門跡の発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報6』1996

(5) 総社市教育委員会「鬼ノ城 角楼および西門の調査」『総社市埋蔵文化財調査年報7』1997



御所ヶ谷神籠石土塁築造推定図(A2トレンチ付近)

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきごしょがたにこうごいし							
書 名	史跡御所ヶ谷神籠石							
副 書 名	福岡県行橋市大字津積外所在古代山城跡の発掘調査概要報告							
巻 次								
シリーズ名	行橋市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 2 6 集							
編 著 者 名	小川 秀樹							
編 集 機 関	行橋市教育委員会							
所 在 地	〒824-8601 福岡県行橋市中央一丁目1番1号							
発行年月日	1998年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号					
ごしょがたにこうごいし 御所ヶ谷神籠石	ふくおかけんゆくはしし 福岡県行橋市 おおあざつみ 大字津積	402133	140183	33度 40分 15秒	130度 56分 00秒	19931110～ 19980331	20,000m ²	重要遺跡 確認調査
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
御所ヶ谷神籠石	古代山城跡	飛鳥時代	土 塁 石 塁	土師器、須恵器		国指定史跡		

史跡 御所ヶ谷神籠石

行橋市文化財調査報告書第26集

平成10年3月31日

発行 行橋市教育委員会

福岡県行橋市中央一丁目1番1号

印刷 (株)文信堂印刷所

福岡県行橋市西宮市二丁目20-22



北上空から御所ヶ谷を望む